

僕はどうやらあの人のことを特別に思い始めているらしい、と古泉は考えている。伍入りのスポーツドリンクは甘ったるく、喉に引つかかるような感じがして不快だった。ウーロン茶にしておけばよかった、と後悔する。

バッテリーセンターはどこか薄暗い。

人工的な明かりでのみ満たされているせいかもしれない。外の光があまりに眩しいので、瞳が錯覚を起こして暗く見えるのだろう。

薄暗いうえに、どこかさびしいのは、自分たちのような若者がほとんどおらず、中年の男女ばかりが黙々とバットを奮っているせいかもしれない。その場合、さびしい、と見えてしまうのは自分たちの偏見に因るものなのだろう。

カーン、という間の抜けた音が響く。

薄暗く寂しいバッテリーセンターは、しかしなかなか賑わっており、ブースは満員だった。古泉もつい先ほどまではバットを握っていたが、今は長門有希と入れ替わりに、ロビーにあるベンチへ腰を下ろしている。

体を動かす仲間たちの背中が、ここからは一望できる。

スカート姿で果敢にボールを打ち返す涼宮ハルヒの背中も、見事なフォームで機

械的に打ち返してはホームランの的へ命中させている長門有希の背中も、よろよろと重たげにバットをふるっては空振りし、今にもその場に倒れ込んでしまいそうな朝比奈みくるの背中も。

(大きいな)

少女達の華奢な背中に比べると、当然ながらキヨンの背中は大大きく頼もしかった。きつちりとした四角で、腕を回すたびに肩甲骨が生き物のように動くのが見える。黒いTシャツに緑のパーカー。ジーンズに包まれた真っ直ぐな足。

自分の口元が緩んでいるのを古泉は感じる。何だか、訳もなく嬉しく、陽気になるのだ。あの首筋。振り返ってくれないかな、と願いながら、このまま気付かれずに後ろ姿を見つめていたい、という欲求も捨てきれない。

少なくとも、恋に似た感情ではある。今のところはそう結論づける外ない。別に、それで問題もなかった。

今すぐ掻き抱かなければ死んでしまうとか、自分のことを同じように思っただけといとかいう、激しい感情ではない。キヨンを見てみると、子供の頃気に入っていた玩具を眺めているような気分になる。あるいは美術館で気に入った絵の前に立ち止まっているような気分。

古泉の恋愛はいつもそんな風で、はじまることもなければ終わることもない。そ

れは古泉の頭の中だけで上映される、短く美しい短編映画だ。

女を好きになったこともあるので自分は完全な同性愛者とはいえないと古泉は思っているが、初恋相手は男だった。

クラスメイトで、転校生で、無口な少年だった。覚えておくことはあまりない。静かな子供だった。よく青いシャツを着ていた。

古泉はその少年を、血の繋がった家族よりもっと好きだと、思っていた。

少年は出会って二年後に転校してしまい、しばらく手紙での交流があったもののいつの間にか途切れて、それからは音信普通だ。小学一年生のときのことだ。

古泉は今でも時々その思い出を大切に反芻するが、彼を捜し出して会いたいと思つたことは一度もない。

キヨンに対するこの掴みどころのない気持ちも、そう経たないうちに消えてしまうのだろう。ひよっとすると、夏が終わると同時に跡形もなくなってしまうかもしれない。

浮かれた夏、異常な季節の、いつときの熱病。夏休みは、あと二週間足らずしか残っていない。九月になって学校がはじまればこんな感情も薄れてしまう気がする。

視界の隅で、パツと涼宮ハルヒが飛びあがった。電子音のちやちな音楽。ホームランに当てたらしい。

「やった！ねえ、今の見た？」

くるりと振り返り、満面の笑みで古泉を見る。古泉は大きく頷き、にこやかにほほ笑みを返した。

「キョン！キョンは？」

すぐ隣のブースのキョンは、はたして涼宮ハルヒのことをちゃんと見ていたらしい。億劫そうに、はいはい見てた見てた、と答えながらもその口元は笑っていたし、目元には何か眩しいものを見るときのようなかすかな皺が寄っていた。

古泉は——なぜか、違和感を覚えた。何一つおかしいところなどない光景なのに。これは嫉妬だろうか？

確かに、嫉妬らしい甘く痺れるような感覚も少しは存在している。

しかしその存在を別にして、確かな違和感が、このシーンにはあった。キョンがはにかみ半分、呆れ半分のへたくそな笑顔で涼宮ハルヒを見ている、その一点に。

古泉は首を傾げる。自分はいったい、何をおかしいと思っているのだろう。不可解なことだ。